倉掛のぞみ園

特　別　養　護

倉掛のぞみ園

赤土のような雨の中を

網井和子（六十七才）

被　爆　地……己斐町（爆心地より三・五km）
当時の急性症状……下痢・出血（歯肉）
家族の死亡……父
現在の症状……肝癌・胆石（術後）

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時十七才でしたが、戦争の激化と共に、挺身隊で三菱の軍需工場で旋盤を使用し、部品を作る作業に従事していました。空襲が激しくなり、工場は己斐のバラック建てに移転しました。被爆当日の八時十五分は、丁度朝礼が終了し、仕事を始めようとした時でした。突然大きな音がし、学徒動員の学生が、驚いて旋盤に飛び込み血まみれになりました。私はすぐに防空壕に避難しました。暫くして、ざらざらした赤土のような雨が降ってきました。己斐から市内を見ると紅く燃えあがり、線路の枕木も燃えていました。一時間位して解散になり、降り続く赤土の雨の中を、己斐から自宅のある草津まで歩いて帰りました。その途中は地獄のような光景で、裸の人、髪の毛の逆立った人、火傷の

人、皮膚がむけ垂れ下がり、衣類もぼろぼろの人達が、幽霊のように「助けて…」「お姉さん水」など助けを求めていましたが、水を汲もうにも何もなくどうしようもありませんでした。とっても恐しくて雨の中を一目散で自宅に向かって走りました。母は妹（三才）を背負って父を探しまわり、三日目に己斐の学校で遺体を見つけ、足の型とシャツの袖口で確認しました。遺体は親類が集まり山で火葬しました。

その後、息子も独立し私はカキ打ちをしたり三菱等で働いていましたが、体調をくずし、十年位入退院を繰り返した後、のぞみ園へ入園しました。戦争、原爆、こんな悲劇は二度と繰り返してはならないという思いでいっぱいです。

御幸橋の上で　御幸橋西詰。手当といっても止血がやっとだった。爆心地から約2.3キロメートル。（中国新聞社提供）

ガラスの破片が体に

石本　サダコ（七十六才）

被　爆　地……東観音町（爆心地より一・三km）
当時の急性症状……外傷・鎖骨骨折
家族の死亡……なし
現在の症状……脳梗塞後遺症・高血圧・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は、丁度東観音町へ引越したばかりで、家や防空壕の中を、一人で掃除・片付けをしている時に被爆しました。崩れた家の下敷きとなり、背骨や鎖骨等が折れたので、一人ではどうにもできず、道行く人に助けを求めると、若い男性が気付き助けてくれました。その男性も体中火傷でズルズルでしたが、肩を借りながら川土手へ逃げました。

空は真黒で、川もどす黒く、死体がいっぱい浮いて流れていました。一緒に逃げて来た男性は、川へ水を飲みに行ったまま戻って来なかったので、もしや死んでしまったのではと心配しました。

しばらく土手に座っていると、衛生兵が通りかかったので助けてもらい、トラックに乗って佐伯郡

観音村観音小学校へ避難しました。
小学校に着いた時、もらった冷たいトマトと水のおいしかったことは、今でも忘れません。
父と再会したのは九月の中頃です。父に連れられて実家に帰り療養していましたが、ガラスが体に刺さっていたので、入浴もできずに難儀をしました。
海軍病院（現・賀茂病院）へガラスの破片を抜きに馬車で通い、一ヶ月たった頃、夫が実家を尋ねてくれ、やっと会えとても嬉しかった想いは、今も心から離れません。
高田町で夫と生活を始めた頃は、骨折が治らず体が思うように動かないので働けず、実家から送ってもらった食物で生活しました。
その後、体もだんだん良くなり働ける様になったので酒等を造り闇商売をはじめ、夫も大工等をして働き生活が落ちつきました。
ＡＢＣＣに通院したので、被爆し黒くなっていた顔も良くなり、体もほぼ元通りになったので、草津に移り住み、カキ打ちなどして生活しました。
平成元年二月、脳出血で倒れ、後遺症で左半身不随になり介護が必要になりました。
その後、平成二年十月、次女が結婚することになり、介助できなくなったので病院へ入院しましたが、私が希望して原爆養護ホームへ入園し現在に至っています。
戦争は二度と起こしてはいけません。平和な世の中であるよう祈っています。

生き地獄

植松清枝（六十六才）

被　爆　地……東白島町（爆心地より一・五km）
当時の急性症状……外傷
家族の死亡……姉
現在の症状……パーキンソン症候群・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

私は、逓信局の四階で事務員として働いていました。八時頃、一階のトイレに行った直後、ドーンという大きな音がしたかと思うと、あたりがまっ暗になり、急いで四階に戻ろうとしましたが、壁や天井が落ち、あがれずそのまま地下へ夢中で逃げました。頭や顔には、ガラスの破片で切れた傷が無数にあったのに、無我夢中で気が付かず、冷たいなと感じた時、瞼が切れ、目をつむっていても、外の明かりが見える程の傷を負って、多量の血が流れていました。近くに兵隊の姿が見えたので、「傷を縫って欲しい」と必死で頼みましたが、今はそんな事は出来ない、と冷たくあしらわれました。

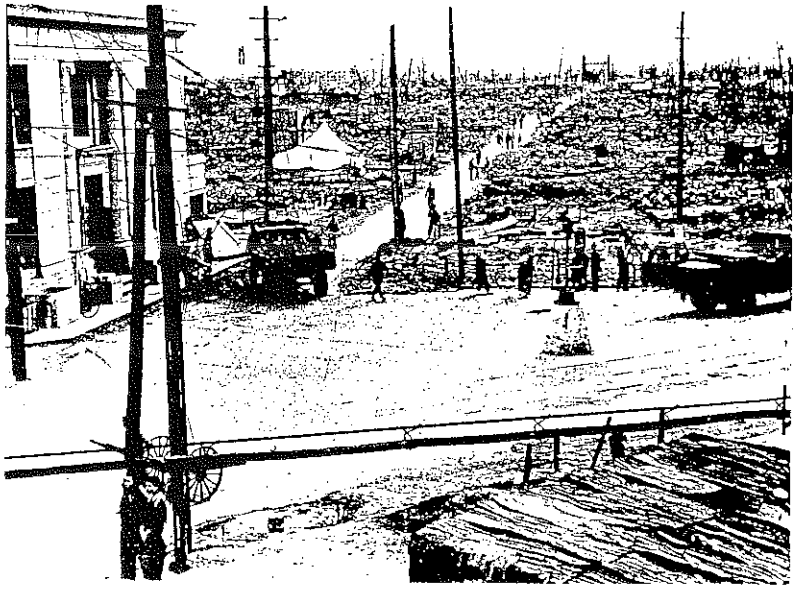
どこかへ逃げなくては、と思い、仕事仲間と縮景園に逃げました。明るくなった広島の町は、今迄

見たこともない地獄の様で、火はどんどん迫り、飛行機は何機も低空飛行を繰り返し、恐くてじっとしておれず、川の中へ飛び込みました。その直後、黒い雨が降ってきました。石油をまいて、全てを焼き尽くすつもりなんだと一瞬思いました。

川は丁度満潮で、多数の死体が浮いて、見た者でないと話にならないほどのむごい情景でした。

木の陰では、「水を頂だい」「水を頂だい」という声がしました。全身火傷で皮膚の垂れ下がった兵隊が、〝連れて逃げてくれ〟と声をかけられましたが、その姿を見たとたん、恐ろしくて急いで逃げてしまいました。ほんとうに生き地獄でした。

この状況では帰宅できないと思い、庄原の祖父母の所へ行く決心をしました。戸坂の同僚が一緒に帰ろうと誘ってくれたので二日泊めても



横川駅前付近　横川駅前から南方を望む。
爆心地から1.8キロメートル。（中国新聞社提供）

らい、古市の小学校にあった診療所で傷の手当をうけ、連絡先を書き残し、木炭バス、汽車を乗り継ぎ庄原へ行きました。

母は、六日朝、弁当箱にご飯をつめ、絣の上着ともんぺ、白い前掛けをつけて出かけましたが、その姿は私が母を見た最後の姿でした。母を探していた父と、天満町へ嫁いでいた姉が、偶然、横川の橋の上で会ったそうですが、姉の姿は、だれか解からない程、無残な姿だったそうです。父はその姉を収容所へ収容し、消息不明の母を探し歩いたそうです。

二度と戦争は、あってはなりません。一日も早く戦争のない世界がくることを祈っております。

近頃思いたって写経を始めました。一字一字を心をこめて書いています。筆に込めた想いが私の心を穏やかにしてくれます。毎日を感謝の気持で一生懸命生きております。

フラッシュのような眩しい光が…

香川妙香（七十九才）

被　爆　地……千田町（爆心地より一・五km）
当時の急性症状……下痢・発熱・全身倦怠
家族の死亡……なし
現在の症状……肥大型心筋症・心不全・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

勤務先であった呉の海軍造船実験部（千田町）にて被爆しました。フラッシュをたいた様な眩しい光がさし込み、その瞬間そばにあった机の下に入っていました。建物の屋根や柱などが落下し、直撃された人達は即死でした。窓際に立っていた人達は光線を浴びて、顔は見る見るうちに腫れ、とても見られた状態ではありませんでした。部屋は暗黒の世界、やっとの事で外に出た時は、夕暮れ時だったように思います。

其の後、被爆地を避け、一人歩いて牛田にある家に帰りました。家屋は崩壊寸前の様に傾いていましたが、家族は無事でいたため安心しました。

二、三日間は防空壕の中で暮らしました。その後は、以前勤労奉仕をしていた呉の造船所に復帰しましたが、戦後軍隊も解散となり必然的に会社も閉鎖されてしまいました。

昭和六十三年、軽費老人ホームコーポなばらに入所していましたが、身体的に弱り不安を感じ、平成五年七月倉掛のぞみ園へ入園しました。とても設備がよくて何不自由なく、安心して生活でき大変喜んでいます。欲を言えば、医療面で自由に屋外の病院へ行けたら〝うれしいな〟と思っています。クラブ活動も色々ありますが、私は〝陶芸クラブ〟で作品作りに熱中しております。

これからの社会は、核兵器を廃止し、世界人類が仲良く暮らしていける事を、強く祈願しています。

勤労奉仕

狩山　紀久子（六十二才）

被　爆　地……松原町（爆心地より二・〇㎞）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の症状……高血圧・狭心症・高血圧性心疾患

被爆時の状況及びその後の生活

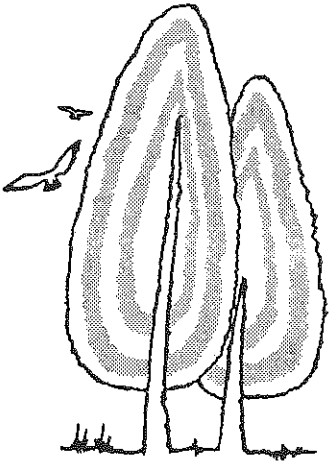
私は当時中学一年生で、八月六日の朝は、駅から小網町へ勤労奉仕に行くため、友達が迎えに来ていましたが、その日に限って、出掛ける準備が遅れたため友達には先に行ってもらいました。少し遅れて出掛け、広島駅前で電車に乗るための行列に並んでいて被爆しました。私の前が大きな人だったので外傷もなく助かりました。その時迎えに来てくれた友達は亡くなったそうでとても悲しく思いました。

被爆直後、愛宕町の母の実家へ行く途中、焼けついた道を素足で歩いていると、一見知らぬ人が草履とおむすびを二ヶくれました。母の実家へ行くも家人は誰も居ず、中山の親戚で二日間過ごしまし

た。母はお産のため休職し、東雲の家に居ましたが、爆風で米粒大のガラスが体に刺さり負傷しました。其の後の体調は優れませんでした。父は生徒の引率で庄原へ行っていましたが、知らせを聞き、私が死体の中にいるのではと思い、二日間探し続けたそうです。家に帰ったところ、無事な私の姿を見て父と抱き合って喜びました。

其の後は、父と一緒に生活し、父親が亡くなって二十代から職に就きました。三星製菓に五～六年勤め、その後大中建装・鉄道会館・大学病院で掃除婦として五十五才迄勤めました。

今では、あの戦争時のことは思い出したくありません。今はただ、教会での祈りと娘時代に習ったピアノをたたくことが私の一番の幸せなのです。



生活苦の毎日

古　金　金　子（八十才）

被　爆　地……舟入本町（爆心地より一・三km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の症状……高血圧症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝は早く起きて、家の中で縫い物をしていました。庭先で大きな光がさし、びっくりして奥の部屋に逃げたら、たちまち屋根、家が崩れてしまいました。がれきのすき間から太陽の光がさし、助かった!!とその時実感しました。電車通りでは怪我人が沢山横たわっており、兵隊は慌ただしく忙しく動き回っておられました。

私は江波から舟が出ていたので、それに乗って庚午へ移りました。その時、黒い雨が降ってきたため、屋根の下に避難しました。其の後、家に戻ってみると既に全焼していて、形も何も残っていませんでした。

己斐に親せきがあり、そこは被災していなかったので、しばらくそこで暮らしていました。妹の安否を確かめるため、以前妹が働いていた廿日市の旭兵器工場まで、自力で歩いて探しました。二週間後、五日市役場に妹が救助されていることを知り、お金がなかったため、自分の着物と白米を交換して妹のところまで持って行きました。

今では、妹がたった一人の家族となりましたが、当時の出来事は今も鮮明に頭に残っております。その後、東雲本町に引っ越し、十五年位移り住んでいましたが、病院に通うのが大変な為、今まで通院していた東雲三丁目古川病院近くに住居を替えました。

これからは、今まで苦労して来た分、健康で穏やかな毎日を過ごしたいと思っています。今では、若い頃習った三味線と唄は、私の唯一の心のささえです。五十年はまたたく間に過ぎていきました。

いつまでも消えない火傷

田中アヤメ（八十三才）

被　爆　地……宝町（爆心地より一・三km）
当時の急性症状……脱毛・火傷
家族の死亡……なし
現在の症状……火傷後のケロイド・左小指屈折

被爆時の状況及びその後の生活

その日私は、鶴見町の家屋疎開に出ていて、宝町で被爆しました。白のポッキリの上に黒の着物、黒のもんぺをはいていましたが、一瞬のうちにボロボロになりました。見ると左肩から腕にかけて手の皮がぶら下がっていました。震えが止まりませんでした。回りも一瞬のうちに火の海になっておりました。必死で手の皮をもとに戻し、比治山橋へ無我夢中で逃げました。その途中、布を拾い手に巻き大河小学校へ逃げました。大勢の人が避難してきていました。その中で居る場所もなく、大河村の一般家屋に行きましたが、いい顔では迎えてもらえませんでした。早く帰ろうと思い、そこを出ました。その夜は、山いも畑の野菜と野菜の間に寝ました。そこで夫婦連れの人が飲み水をやかんにくん

で飲ませて下さったのは、とてもおいしく生き返ったような気持ちでした。

次の朝、その人達と一緒に大河の交番へ罹災証明をもらいに行き、そこからまた歩き、段原のいとこの所に行きました。そこで傘の油が火傷にいいと聞き、腕に塗ってもらい、芸備線矢賀駅まで歩き、矢口駅まで汽車に乗り、川口まで歩き、やっとの思いで我が家にたどりつきました。年老いた両親は、二人共きび畑へ避難し、火の粉をきびの葉ではらって、怪我もなく無事でした。

終戦後、主人が大阪より帰ってきて、医者に火傷を診てもらう時、化膿の臭いで近寄ってくれません。そんな中で、火傷には、番茶で洗い、つわぶきの葉の液をかけるといいと聞き、何度も腕にかけました。夏の暑い日にはうじ虫がわき、主人に箸でつまんで取ってもらったのが忘れられません。少しづつ火傷が治りかかった頃、頭髪がパラパラと抜け坊主になりました。それでも火傷の手

ホームの「敬老祝賀会」風景

を布でつって宝町にバラックを片づけに行っていました。
主人の死亡後、一人暮らしが不安になり自分の持ち家を手離し、平成元年可部にあるコーポなばらへ入所しましたが、平成四年吐血後胃潰瘍で安佐市民病院へ入院。その後安佐南区特別養護ホーム和楽荘のショートステイを利用し、その後原爆養護ホームに入園いたしました。
今にすると、無我夢中で生きてきて五十年。とても早く感じております。親切だった夫との死別はとてもつらいことでした。ホームに入園し、体調も良くなり、設備の整った中で何不自由のない今の生活、職員の皆さんに親切にしていただき、とても感謝して毎日過ごしています。再び、戦争、原爆など起こらないよう、平和な日が続く事を祈っています。

地獄のような街

武田光子（七十才）

被爆地……観音町（爆心地より二・〇㎞）
当時の急性症状……脱毛・発熱・全身倦怠
家族の死亡……母
現在の症状……脳出血後遺症（右片麻痺・構音障害）・高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

自宅で電話をかけている時、飛行機の音がした直後ピカッと光り、ドンと強烈な音がして被爆。家からはって出て逃げました。

家には軍需工場があり十人位の人が働いていましたが、皆バラバラになり行方不明になりました。

私は、海の方へ向かって逃げました。観音町の人は地御前に逃げることになっていたので、川を渡って己斐に出て地御前に行きました。

街は全身火傷をした人、頭を焼かれ麻痺している人達が大勢いて、地獄のようでした。

言葉に表わせない程ひどい状態で、あまり思い出したくありません。

次の日、歩いて佐伯町まで帰りました。帰る途中、民家の明かりがあかあかと灯っているのを見て「皆がこんなにひどいめに会っているのに!!」と腹だたしく思った事が強く印象に残っています。

戻って事務員をして生活しました。

夫死亡後も会計事務をして生計を立て、弟と二人暮らしをしていましたが、弟が倒れたため介護をしていました。

弟が施設へ入所し、私自身も倒れたため舟入むつみ園に入所しましたが、病気が長びいたので退園し、病院を転々としました。

病院にいるべきか迷ったのですが、ホームの職員が入院先の病院に様子を見に来てくださり、すすめてもらい決心し入園しましたが、今では、皆さんによくしてもらって有難く思っています。私にとって、この五十年は、つらく苦しい長い年月でした。

燃え続ける闇の中の炎

中農アヤ（九十才）

被　爆　地……仁保町丹那（爆心地より四・〇km）
当時の急性症状……頭髪が抜ける
家族の死亡……なし
現在の症状……胆石・白内障・パーキンソン症候群

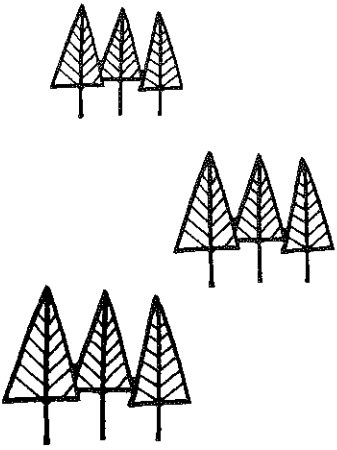
被爆時の状況及びその後の生活

私は、丁度大阪から吉浦の伯母の家（医者）に薬をもらいに来ていました。伯母は広島の友人の家に行っておりました。八月六日の朝、私は大きな音で一瞬気を失っていたようです。我に返ってみると、硝子戸はこわれ、棚の物等全部落ちていて、足の踏み場もなく、震災の時のようでした。幸い私は怪我もせず、伯母夫婦も無傷でしたが、家は壊れ、とても住めるような状態ではありませんでした。

街は、あちこちで火の手が上がり、夜になっても消えることなく、真っ赤に燃え続けていました。私はいつ、どこをどう歩いたのか、どのようにしてたどりついたのか分かりませんが、伯母と一緒に乗り物を乗り継ぎ、大阪に戻りました。

帰阪後は、義弟夫婦と同居していましたが、八十才の時、別府のつるみ病院に入院、八十五才の時、腸にポリープができていることがわかり、義妹の勧めで広島に戻り、平成二年四月福島生協病院で手術、桧田病院で療養生活を送っている時、舟入むつみ園の事を知り入園することになりました。その後、倉掛のぞみ園に移り、今は好きな花をそっと小さな壺に活けたり、俳句を詠んだりの静かな毎日を感謝しながら送っています。

世界が平和であってほしい、ただそれだけを願っております。



死体の中を泳いで

中本　フミヱ（七十三才）

被　爆　地……西蟹屋町（爆心地より二・五km）
当時の急性症状……外傷・歯が折れる
家族の死亡……なし
現在の症状……糖尿病・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は、西蟹屋の日通軍用課被服省に勤務しており、屋内で被爆しました。店は崩れて下敷きになりました。体の方は、火傷や傷などはありませんでしたが歯は折れていました。

入口に近い所にいた為にすぐ外に避難できたので、会社の人達と一緒に、広島駅裏の方から牛田方面へ逃げました。それから両親を捜す為に、白島の長寿園を経て大芝公園の方へ行く途中、橋がなくなっていたので川を泳いで渡りました。川の中は死体がいっぱい流れていましたが、一生懸命泳いで無我夢中で、他人のことどころではありませんでした。実家には誰も居らず、両親は親戚へ避難していたので、そこへ又尋ねて行きました。

一週間位黒い唾が出ました。

主人は暁第二部隊に所属していて、キリンビヤーホールの所で被爆しました。

その後八年間位入退院を繰り返し、苦しい毎日が続きました。それからも主人はずっと病弱で、昭和四十一年に四十九才で死亡してしまいました。

子供が独立し、私も年をとり病気がちとなり、高血圧・腎臓病・糖尿病などから失明し、一人で生活をすることができなくなりました。

原爆は、光がとても強烈ですごい音がし、一瞬の内に真暗となり、気がついた時は建物は崩れ下敷になっており、生きた心地がしないくらい恐ろしいものでした。原爆投下されなければ、戦争がなければ、家族一同元気で暮らすことができたと思います。

私の両親や弟妹・主人も被爆の後遺症で全員死んでしまいました。私のような苦しい体験を二度と子供達に会わせてはいけないという思いで一杯です。

平和を願っています。いつまでも!!

死を覚悟の「水を下さい」

西本良子（六十八才）

被爆地……雑魚場町（爆心地より一・〇km）
急性症状……脱毛・外傷
家族の死亡……なし
現在の症状……心不全・脳梗塞後遺症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は、あの日、火に追われながら比治山橋から飛び降りたまでは覚えていましたが、それからは全く記憶がありません。母親と祖父が川に浮いていた私を陸に上げ、宇品の軍隊の人が来て水をはかせてくれたそうですが、手は火傷し、意識不明は八月十五日の終戦になってからも続きました。歯茎からの多量出血・貧血・そして聞こえない耳、声も出なくなり、火傷も治りませんでした。薬も無く、食糧も有りませんでした。

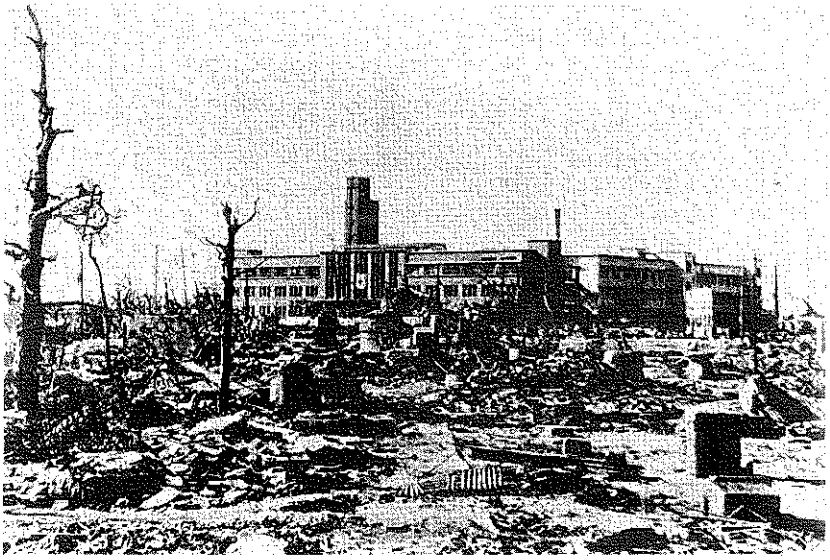
やっと意識が戻ったのは、母がローソク一本の明かりで、仏様に祈っている時でした。

火傷と発熱で頭がガンガンし、水がとても飲みたくて、私は、「死んでも良いから水を下さい。」と

懇願し、母をとても困らせたと後に聞きました。傷からの出血はいつまでも止まらず、祖父のきざみ煙草をほぐし、傷につけたりしました。

昭和二十年十二月、私は、紫斑点が体に出たことから、死の恐怖の為、「もう死ぬる!!死ぬる!!」とわめきちらしました。軍医さんが日赤に連れて行って下さったそうです。耳鼻咽喉科・内科・外科と治療を受けましたが、傷は全然治らず、手は足の皮膚を移植し、骨まで出ていた火傷がやっと治ったのは、昭和二十八年頃でした。しかし、栄養不良も原因して、紫斑点も出た為高熱が続き、長い入院生活が続きました。

被爆当時を思えば身の毛のよだつ思いでいっぱいです。あの時の惨事は、忘れようとて忘れる事の出来ない戦争でした。平和の為に、非核三原則の立法化を訴え、叫び、「核を作るな!!」「持たせるな!!」という言葉を、全世界の人々



広島赤十字病院　焼け跡の町を被爆者たちは、赤十字マークのビルへ殺到した。
（中国新聞社提供）

に知ってもらわねばなりません。

私は、この五十年間を、深い苦悩の底から這い上がって生きて来ました。今、ここ倉掛のぞみ園の職員の方々や入園している人達の励ましの声の中で、生きる喜びに手を合わせ、今後、いつ迄もよろしくと願うばかりです。博愛の愛の手にいだかれて、一日一日を感謝の気持で生きております。

子供を背負い避難

野村定子（七十六才）

被　爆　地……広瀬元町（爆心地より一・〇km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の症状……脳梗塞後遺症・胃線腫・慢性肝炎・気管支喘息

被爆時の状況及びその後の生活

私は、親子四人と姑の五人家の中で被爆しました。家が傾いただけで、家族は火傷もせず、ほっと安どし胸をなでおろしました。

子供は一才と三才でした。
姑は、民生委員の役員をしていたため、人の救助に行くからと自宅に残り、親子四人は、子供を背負って、横川まで歩いて逃げました。その時の恐ろしかったことは今でも忘れることができません。
横川の警察の指示により、可部の叔母の家まで歩いて行きお世話になりました。
主人は、姑を探しに何度も行きましたが、一週間位たった頃、真黒に汚れた姿で、トラックの荷台に便乗し帰って来ました。
しかし、姑は、被爆後二十日で死亡しました。
広島は火災で焼けていたため、我が家に戻る事は出来なくて、叔母の家に三ヶ月お世話になりましたが、いつ迄も迷惑を掛けられないと思い、実家の松山へ行くことにしました。
可部から宇品まで親子四人歩いて出て、高浜行きに乗船しました。
松山には五年位暮らしましたが、広島が大丈夫と思い行く当てがないまま帰広。
焼け残った家を借りて、三年位暮らしました。
主人は、広島市役所に勤務し、翠町に売家があったので購入し五年住んでいました。
基町の我が土地は狭くなっており、打越町の土地と替えてもらい、家を建て、昭和五十五年迄住んでいました。
主人は、定年後、癌と脳梗塞で闘病生活となり、在宅で私が二年間介護しましたが、私も看病疲れのためもあり、脳梗塞で入院することになってしまいました。
退院後、病弱のため介護ができなくなった為、夫婦で平成五年三月に倉掛のぞみ園へ入園しました。

主人は、平成六年五月死亡しました。
現在、花や植木の手入れを楽しみながら過ごしております。

強烈な閃光

原田　幸恵（七十一才）

被　爆　地……千田町（爆心地より二・〇km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……父
現在の症状……慢性関節リウマチ・脳腫瘍（術後）

被爆時の状況及びその後の生活

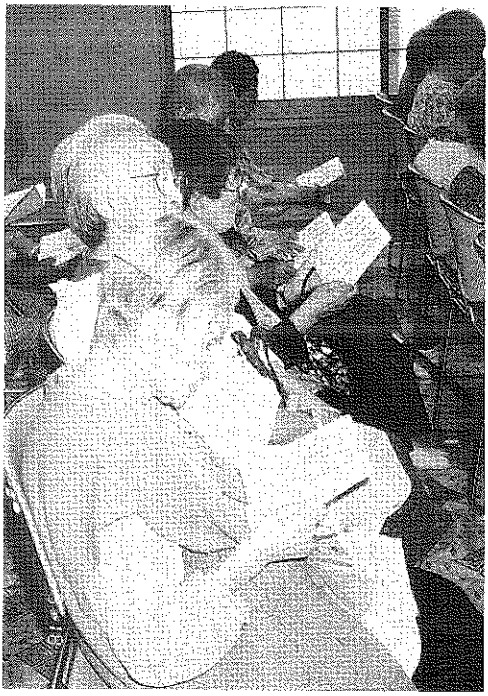
私は当時二十一才で、広島電鉄の事務員として勤務していました。千田町の会社内で朝礼の時間事務所に居た所、突然光ったのです。

それは電車のスパークかと思いました。いつの間にか課長の机の下に入っていたお陰で、かすり傷一つしないで助かりました。朝礼に出た人はほとんど怪我をしていました。

会社を出て御幸橋の方へ逃げた時、大河町の派出所のところで、火傷のひどい人の悲惨な状態を見たのが印象に残っています。父は自転車で、出勤中に被爆しました。弟が連れ帰り、温品で養生していましたが、八月二十七日に死亡し、悲しくて胸がつまりました。母は屋内で被爆し、傷を負いましたが現在九十才で健在です。上の弟は工兵隊に入隊しており、西練兵場で被爆して屋根の下敷きになり、肩の方に傷を負いました。現在は病気がちです。下の弟は、学徒動員で兵器廠に行っており被爆しましたが、屋内にいて怪我もせず現在も元気です。

二、三年後国泰寺に家を建て、親子四人で移り住みました。三十五才でリウマチが発病しましたが、昭和四十四年くも膜下出血で退職する迄広電に勤務しました。結婚はせず、二人の弟達の結婚後は母と二人で借家に住み入退院を繰り返しながら平成五年七月入園しました。

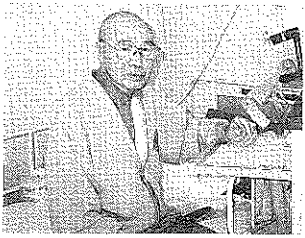
母が良くこれまで長生きをしてくれたと思います。多くの犠牲者の出る様な事を二度と起こして欲しくないと思います。



毎月の法話風景

鮮烈なあの日の記憶

山口　勝四郎（八十八才）



被爆地……舟入幸町（爆心地より一・五㎞）
当時の急性症状……下痢・下血・発熱
家族の死亡……なし
現在の症状……脳梗塞後遺症・高血圧・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

私は、工場内にある事務所で、兄嫁らと、学童疎開していた姪のことを話していました。突然、ピカッと光り、火の粉が降ってきて、私は机の下にもぐろうとしましたが、電話機か何かが頭上に落ちてきて気を失いました。どの位の時がたったのでしょうか。「大将!!」と呼ぶ声で気がついた時は血だらけでした。工場も柱が倒れてしまい屋根だけがあるのみです。従業員は一人が負傷し、他はそれぞれ家に戻ったようでした。姪の様子を見に家を出ましたが、町は焼野原で、東西南北が見回せる状態になっていました。姪の身体が半分焼けてしまったむごい姿を見つけましたが、何もできず、ただただ可哀相でなりませんでした。通りには、力つきて倒れてそのまま息絶えた人、水を求めて共同水道

のある所まで行ったが水が出ず倒れている人、沢山の死体と悲鳴に似た助けを求める声、息も絶え絶えに母を求める声、衣服はボロボロに焼けて、殆ど体に衣服をつけているものはなく、私には何もしてあげることが出来ませんでした。

朝から良い天気だったのに、ピカッと光ってから一日中夕暮模様でした。間もなく、倒壊した工場に母屋からの移り火で、みるみるうちに火の手が上がり、消す水もなく、ただ見ているしかありませんでした。住吉橋に死体がひっかかった様子は、今でも忘れることが出来ません。橋の桁に木材と共にひっかかり、川幅一杯でせき止められて浮いているのです。八月九日より死体を引き上げる舟が出ました。舟は橋の上に二隻、下に三隻、各三人づつ乗り込み、上の舟が取りそこねたら、死体は流されて似島方面に流れて行ったようです。その死体はまともなものはなく、男女共ゴム風船のように浮き上がり、

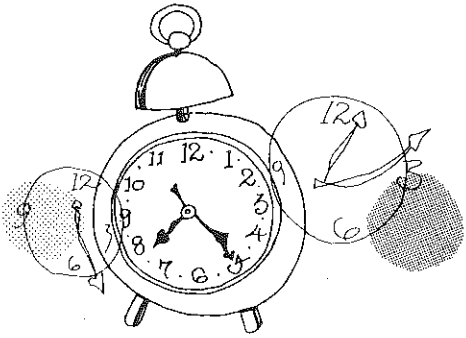
原爆ドームを望む　真上からの爆風で木は枝をはらわれ、家屋も押さえつけられたような形で倒れた。　（中国新聞社提供）

赤く膨らんでいました。中には目玉が飛び出て、バナナの皮をむき取ったように、先が黒い目玉で十センチ位の長さで白く二本飛び出た死体を見ました。そして広場に死体を積み上げた前を通りかかると、風もないのにガラガラと音をたてて落ちてきました。

その後私は、体調が悪く寝こんでしまいましたが、将来のことを考え、自分には鉄工しかないと思いました。ピカドンにより一から出直すため一生懸命働き、なんとか従業員を雇い働ける工場を建てることが出来ました。

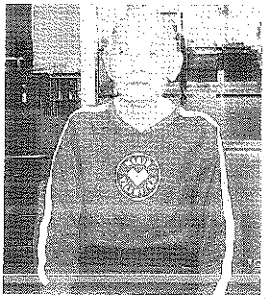
平成四年九月十四日脳梗塞で右手足半身不随になり、今は倉掛のぞみ園でのんびりと過ごしております。

あの日の惨状を再び繰り返してはいけません。戦争のない平和な毎日が続きますよう願っております。



徴兵検査

山中幸吾（八十八才）



被　爆　地……安佐郡祇園町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の症状……脳血栓後遺症・高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

工場の朝礼も終わり、仕事をしようとスパナを握ろうとした瞬間、爆風で吹き飛ばされそうになりました。半壊状態の工場のガラスは全て粉々に割れ、周囲は薄暗く闇の中に私は居りました。外を見ると、大きな赤い火の玉が舞い上がったように映り、ガスタンクが爆発したのかと思っていました。原子爆弾が落下されたなど思いもよりませんでした。自宅も半壊状態でしたが、幸いにも火災は免れました。壊れた箇所は工場が近かったので、道具を借りて修繕し、当座の雨風を防ぐ家を辛うじて保てたのは本当に幸いでした。

原爆投下された日から終戦までの記憶の中で一番強く印象に残っていることは、次の様なことです。

徴兵官による検査、実験（敢えて本人はこの表現をされました）が何度か行われました。「自分の身を捨ててでも秘密を守れるか」「極限の苦しみに耐えることが出来るか」。この実験というのは、火の中に飛び込み脱出する、という内容で行われ、実行力、精神力、勇気などを体を張ってテストするものでした。普通の神経の人も、又精神的に弱い人は尚更のこと、到底出来得ることではありませんが、私は消防士の経験のためか、度胸もあり恐怖感もあまりなかったので合格し、いつでも赤紙が来次第、伍長として出征することになっていました。

昭和五十六年妻が脳卒中になり、介護していた私も脳血栓になり、困ったあげく妻は神田山やすらぎ園へ入りました。私も病弱なため心細く、一人で不安な状態で暮らしていた為、倉掛のぞみ園へ入園し、現在はとても穏やかな気持ちで、毎日を一生懸命生きております。

年末恒例の餅つき会

二年間も続いた粥ばかりの食事

山岡　カズミ（九十五才）

被　爆　地……出汐町（爆心地より三・〇km）
当時の急性症状……脱毛
家族の死亡……なし
現在の症状……高血圧症・閉塞性動脈硬化症・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

私は、近所の店に買物に行っていた時、被爆しました。被爆距離が遠かったため、家は無事で、怪我や火傷はしませんでした。すぐに家に戻ると、退避命令が出され一日中何も食べず、退避壕の中におりました。二日位の後、私は婦人会を手伝い、皆におにぎりを作り食べていただきました。

食事の配給は粥ばかり、そんな食生活が二年間位続きました。子供につらい思いをさせたくないと思いましたが仕方のないことでした。夫は軍隊に入隊していましたが、終戦後は仕事もなくなり、皆で高田郡吉田町へ帰りました。長男は志願し、特攻隊に入隊していましたが、朝鮮から終戦の翌年に帰って来ました。その時長男は、家族全員が無事で居るとは思ってもいなかったようでした。久しぶ

りに喜びの対面でした。長男が無事に帰って来た時の、あの嬉しかった思いは、今に至っても忘れることが出来ません。

三十年連れ添っていた夫が亡くなり、一人になりました。広島市内に在住の次男が同居しようと言ってくれたので、吉田町を離れましたが、体調をくずし、入院が必要になり、結局次男宅には一週間位しか居ませんでした。其の後このホームに入り、毎日が楽しく、又感謝の気持で生活しております。

平和であるからこそ、幸せでいられると思います。そして、二度とこんな事（戦争）を起こしてはいけないと思っております。

秋の月見茶会

焼けつくような閃光が

深山恒子（八十五才）

被　爆　地……吉島羽衣町（爆心地より二・〇km）
当時の急性症状……下痢
家族の死亡……なし
現在の症状……脳動脈硬化症

被爆時の状況及びその後の生活

私は、中区加古町に六人の兄弟の三番目として生まれ育ち、尋常高等小学校卒業後は、裁縫等習い事をして過ごしました。二十四才で結婚し、三人の息子に恵まれていました。

八月六日、朝食の片づけをしていた時、目も開けていられない様な閃光を受け、気がついてみたら、物は倒れ壁は落ち、窓硝子は散乱し、足の踏み場もない状態になっておりました。

長男は、比治山の学徒動員、次男は疎開し、三良坂へ出ていました。

吉島の飛行場に集まるようにとの連絡が入り、隣に住んでいた兄嫁さんを連れて飛行場へ行きました。

途中、人は倒れ、川には水が見えない程の死体が「所狭し」と浮いていました。まるで生き地獄を見た気がしました。

幸いにして、私と息子に怪我は無く無事でした。

我が家を奪われた私は、一日知人の家に泊まり、その後は吉島に戻り、自分達で小屋を作り、兄・兄嫁・長男・次男の五人で暮らしました。当時は食べる物も無く、家の前に畑を作り麦を植え、碾いて食べて過ごしました。

一年余りして夫が戦争から戻ってきました。夫は、五十才で病死しました。

在宅での人間関係を継続するよりも、ホームでの生活を強く希望し、又、子供の勧めもあり倉掛のぞみ園へ入園しました。

戦後五十年が過ぎた今では、平和の素晴らしさを身にしみて感じております。

二度と戦争があってはならないと思います。

トラックで運ぶ死体

松本秋子（七十才）

被爆地……楠木町（爆心地より二・〇km）
当時の急性症状……外傷
家族の死亡……なし
現在の症状……心肥大・不整脈・腰痛症

被爆時の状況及びその後の生活

私は、一才半からの小児麻痺のため、当時、楠木町の自宅で家事手伝いをしていました。その朝は、風呂場で洗濯中「ピカッ」と光った瞬間、窓ガラスが全部飛び散りました。

私は、頭部を打ちましたが、母親と一才半の弟は無事でした。一番心配したのは、当時女子商に通学している一年生の妹のことでした。妹は、疎開の手伝いで並んでいる時に被爆し、人の影にならなかった首筋と手に大火傷をしたのです。

自宅にいた三人で、線路の横を歩き、五日市楽々園の知人宅までたどり着きました。

妹の安否が気になっていた時、妹はトラックに乗って、玄米のおむすび二個を持って楽々園までき

たのです。

知人宅の窓から見た光景は、つらく悲しいものでした。トラックで運んできた死体を焼いていたところだったのです。今でもその時の状況が目に焼きついています。

その後、家族四人で佐伯郡玖島の田舎に行きました。

それから一年後、舟入に住む伯父の近所に家を建てて、東洋工業に努める弟と五人で、煙草と本屋を営みながら暮らしました。

兄弟は、それぞれ独立し、父母も亡くなり家業も辞め、細々と暮らしていましたが、体調も不安になり、平成六年十月二十四日にのぞみ園に入園しました。

私にとっては、長い長い五十年でした。

怪我人で一杯の避難先

森本　キクノ（九十一才）

被　爆　地……平塚町（爆心地より一・五㎞）
当時の急性症状……背中打撲
家族の死亡……夫
現在の症状……陳旧性心筋梗塞・心不全・慢性関節リウマチ・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝、弟が尋ねて来て縁側に腰かけ話をしていた時、家の前の白い塀が真赤になりびっくりした途端、天井が落ち瓦がガラガラと落ちて来ました。しかし幸い大きな怪我はしませんでした。しばらくして、二才の子供がいないのに気がつきました。その時玄関の方で泣き声がして行くと、庇が斜めに落ちたその隙間にうずくまっていました。当時山中高女に行っていた二番目の娘が工場を休んで家に居たので、一緒に二才の子供を助け出し、側にあった縫いかけの浴衣でおんぶし、二女には非常時用のリュックサックを背負わせて、川の方に向けて逃げましたがその時の恐ろしさといったら

口であらわせません。

比治山が避難先になっていたため、山の防空壕に入りました。そこは怪我人で一杯でした。その中にいた娘さんが、ブラウスもスカートも鋏で切ったようにボロボロで裸同然の格好だったので、リュックサックに入っていた風呂敷を腰に巻いてあげました。私は防空壕に四・五日おりました。食物は兵隊さんが乾パンを一日に一袋配って回られました。

私の家は半壊で、柱も残っていたので、修繕すれば又住めると思っていました。しかし山の上から眺めていると、猿候橋の方から火が上がり、川下に向いて燃えて拡がり全部焼けてしまいました。主人は火傷がひどく苦しんでいたところ、憲兵の人が病院に連れて行かれましたが、どこの病院かわからず、毎日捜しまわりました。やっとのことで捜した時には、二日前に死んでしまっていました。服は出て行った時のままでしたが、時計も財

地域の子供会平和学習

布もなくなっていました。死に目に会えず、残念な想いが現在も残っています。
幸いにも、ミシンを観音町の里に一週間前に疎開させていて助かりました。それからは、洋裁をして子供を育てました。そのミシンは今でも使えます。
月日のたつのは早いものです。あの日からもう五十年過ぎました。戦争は二度としてはいけません。今の平和な日が永久に続くよう願っております。

土手で夜を明かし

吉野　サヨミ（七十五才）

被　爆　地……西蟹屋町（爆心地より二・五km）
当時の急性症状……下痢・脱毛・発熱
家族の死亡……なし
現在の症状……再生不良性貧血

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝は、姉、妹、子供と家に居て朝食前でした。私は、子供を抱いて外に出た瞬間ピカッ

と光ったので、焼夷弾かと思い「また落ちたよ」と声をかけながら、隣の古田さんの裏庭にかけ込みました。回りは真暗になり、壁が倒れかかったので、子供を抱いてその場から逃げて、外に出、回りを見ると、家の屋根や瓦・壁も落ちガラスも砕け、人々は埃まみれになっていました。

家が心配になり帰宅すると、妹は顔を怪我して血が流れていました。家族、古田さんや他の大勢の方と一緒に府中方面に逃げました。その日は、学校のそばの土手に避難しました。火傷、怪我をした人は、校舎に入り、その他の人は土手で一夜を明かしました。

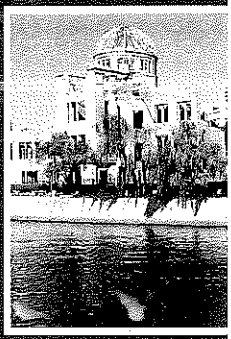
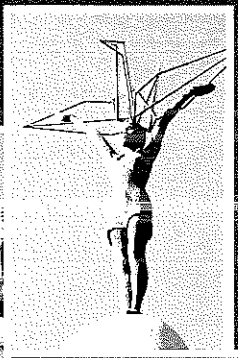
次の日の七日は、馬小屋のような所へ避難し、むすび一ヶを貰い一晩過ごしました。八日になって、家が心配になり帰宅して見ると、能美から両親が来て、家を片づけてくれていました。

近所のうめちゃんが、背中に火傷をしていたので、砂谷村（地御前あたり）まで連れて行ったのは、九日の日でした。途中お腹がすいたので田んぼの水を飲み、歩いて避難しました。

母は、後片づけをしたためか、後に、髪が抜けたり腹を下したりして、すまなかったと思います。主人は、昭和十九年九月ルソン島で戦死、子供はカリエスで、その上被爆していたからでしょうか、五才で死にました。被爆後十日で能美の生家に帰り、平成三年六月まで暮らしました。平成三年七月紫斑病が出たため、八月二十日、日赤病院に入院、平成六年五月、病状が安定したので、倉掛のぞみ園へ入園しました。現在、月に二回姪に付きそわれて、日赤病院へ受診しております。

紙碑・被爆老人のあかし　第四集

平成七年十二月十一日　印刷
平成七年十二月十五日　発行

編集者　財団
発行者　法人　広島原爆被爆者援護事業団
広島市安佐北区倉掛三丁目五〇番一号

印刷　株式会社　ＳＡ社
〒730　広島市南区比治山町七番一九号
電話（〇八二）二六四―一一四八